

### 法華寺旧境内の調査（平城第514次）

今回の調査区は、現在の法華寺境内の南方、平城宮東院庭園の東方にあたり、奈良時代の法華寺の南東隅に位置します。すぐ西側では大規模な石敷の苑池等が見つかり、光明皇后の一周年忌がおこなわれた阿弥陀浄土院とされています。周辺ではこれまでの小規模な調査でも、太い掘立柱の根元や奈良三彩の瓦が見つかっており、どのような建物が展開していたのか注目されてきました。昨年度におこなった第501次調査では、数期におよぶ掘立柱建物を発見しており、今回は、この成果をもとに7カ所におよぶ調査区を設定しました。

調査の結果、奈良時代の掘立柱建物や瓦溜り等の遺構が見つかり、大型の掘立柱建物が建ち並んでいたこと等があきらかになりました。しかし、部分的な調査にとどまったため、具体的な建物規模や配置まであきらかにすることはできませんでした。奈良時代の遺物としては、とくに南寄りで緑、白、褐色に彩られた奈良三彩の瓦が多く出土しました。軒平瓦は同じ坪でこれまで出土しているものと同型式のものです。また、奈良三彩の鬼瓦も出土し、平城宮に準ずる三彩瓦葺きの建物があった可能性が高まりました。更に、今回の調査では室町時代後半頃から江戸時代の溝が、この地域を取り囲むように巡ることもわかりました。溝の堆積土からは「かわらけ」と呼ばれる土師器の皿や箸、漆器、曲げ物、下駄等生活用品が多数出土し、この周辺に集落が形成されていたことがあきらかになりました。平城宮周辺での集村化の実態を考えるうえで、きわめて重要な発見といえます。

（都城発掘調査部 神野 恵）



瓦溜り（南西から）

### 平城京左京三条一坊一・二坪の調査（平城第515次）

朱雀門のすぐ南東、朱雀大路に面する一角は、緑地公園として利用されていました。平城京の条坊といえば左京三条一坊にあたります。ここに国土交通省によって平城宮跡展示館（仮称）の建設が計画され、2010年度から継続的に発掘調査をおこなっています。これまでの調査で、奈良時代前期には鉄鍛冶工房や多くの掘立柱建物が営まれ、その後は坪を囲う築地塀を持たない広場のような利用の仕方がなされたことがわかっています。今回は水路の付け替え部分の調査で、南北2カ所の調査区を設定しました。北調査区は東西12m、南北10mの120m<sup>2</sup>、南調査区は東西12m、南北12mの144m<sup>2</sup>です。調査期間は2013年5月16日から5月31日でした。

どちらの調査区も既設の水路用コンクリートボックスによって遺構面の一部が破壊されていましたが、その他の部分の遺構の遺存状態は比較的良好でした。特に南調査区では一坪と二坪を区切る三条条間北小路とその南側溝を検出しました。また、新たに古墳を1基検出しました。古墳は周濠だけが残っており、墳丘はすべて失われていました。周濠の大きさから径10mほどの円墳であったとみられます。周囲からは円筒埴輪や形象埴輪片が出土しており、出土した須恵器とあわせて古墳時代後期前半（6世紀前半）の古墳と考えています。周囲の埋土の状況から、平城京の造営にともなって墳丘が削平され、周濠が埋め立てられたと考えられます。今回の調査により、平城京造営以前の土地利用のあり方や、京の造営による土地改変の一端があきらかとなりました。

（都城発掘調査部 川畠 純）



古墳の周濠と三条条間北小路南側溝（南東から）